The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「作品」 : 新進作家の檜舞台
Author(s)	松本, 和也
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 25-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102888
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「作品」
―― 新進作家の檜舞台

松本和也

「文学」編集同人であった深田久弥・堀辰雄・永井龍男・吉村鉄太郎と、「1930」の小野松二とが合流し、そこに誌名命名者でもある小林秀雄らが加わって、一九三〇年に創刊された雑誌が「作品」である。創刊号（一九三〇・五）の「編輯後記」で《「作品」は作品そのものをもつて対文壇的な仕事をする。それは強ちに創作ばかりとは限らない。随筆や感想も亦それらが一篇の作品として見られるに足だけのものをもつて充満させるつもりでゐる》と謳って出発した。同誌に対しては、創刊四年目の昭和九年に、《現在小野松二が編輯主任となり、三原達夫などが之を輔けて一種独特の高雅な商品と颯爽たる活気を誌面に滲ませて、特異な存在となつてゐる》という紹介につづき、《同人雑誌といふよりはもう一廉の文芸雑誌》だという評価がなされている（P・Q・R「同人雑誌展望」「文芸通信」一九三四・二）。

ここで、創刊時からの特徴として確認しておきたいのは、「作品」がたえず読者を意識し、その反応を誌面にも反映させたインタラクティブなメディアだったという点である。第九号からは「読者通信用紙」が奥付上部などに付され、以後「同人通信」とあわせて「読者通信」を舞台に読者の声が誌面を賑わせていく。中でも特筆すべきなのは、小林秀雄「オフェリア遺文」（「改造」一九三一・一一）をめぐる一連の議論である。同作発表の翌月、「読者通信」（「作品」一九三一・一二）には吉田創二と飯尾一郎の感想が掲載され、特に後者は《できるなら「作品」誌上にも氏（小林秀雄の／引用者注）の小品が欲しく思ふ》と述べている。同号では、辰野隆「妄評無罪」も「オフェリア遺文」に言及しているが、翌月には河上徹太郎「小林秀雄へ――「オフェリア遺文」読後感――」（「作品」一九三二・一）が掲載される。するとその翌月には、河上評を批判した本山茂也の一文が「読者通信」（「作品」一九三二・二）に載る。さらに、その翌月には、則武一雄「「オフェリヤ遺文」小解」という三頁強にわたる批評文が「読者通信」欄（「作品」一九三二・三）に掲載される。ここに、「作品」という場の特質が鮮やかに示されている。

さて、「作品」の歴史と太宰治との接点へと話題を転じていくならば、いわゆる文芸復興期にその誌面は、執筆陣の変動に伴い一変する。これに大きく関わったとされるのが、一九三三年一〇月に創刊された「文學界」の動向である。一九三五年一〇月、「文學界」は旧同人を解散し、新たに河上徹太郎ら「作品」執筆陣を加えて組織を再編成したのだ。「満五周年記念号」（一九三五・五）を迎えた「作品」に、《「作品」か

ら巣立つた作家も随分多い。今文壇で中堅作家又は新進作家を以て称せられてゐる人達は、殆んど皆「作品」誌上にその作品を発表して来た人達である。編集者としての小野松二君の良心、鑑識眼は十二分に信頼されていいと思はる》という石田幸太郎の評価が掲載されるのと前後して、「作品」は新進作家の檜舞台へと変貌を遂げていく。その代表的な存在こそ、「佳人」（一九三五・五）での小説家デビューから新進作家として「作品」を舞台に小説を発表しつづけ、ついに「普賢」（一九三六・六～九）で芥川賞を射止める石川淳に他ならない。受賞後の「後記」（一九三七・四）では小野松二も、《石川淳氏の「普賢」（「作品」昭和十一年六、七、八、九月号所載）が芥川賞を受賞した。以て本号をその記念号とした所以であるが、本誌が又、石川氏の実力を広く世間に紹介することに役立つたことは欣快に堪えない》と自讃している。

ここに、新進作家にとっての、「作品」の意義・役割の一端を確認することができる。

このような、第二期とでも呼ぶべき「作品」というメディアの特徴は、同人雑誌と商業雑誌とをまたぐような位置にあって、新進作家が活躍し得る檜舞台だったというあたりにあるだろう。《営業雑誌でも同人雑誌でもなく、その中間のやうな、或は特定のグループの機関誌といつた風のものが、此頃可成り存在してゐる》と指摘する「文芸時評⑤新潮・作品の諸作」（「中外商業新報」一九三五・六・二九）の舟橋聖一も、一連の雑誌に「作品」を含めている。そして、ここに「作品」初期のインタラクティブな誌面づくりの伝統をみることもできる。こうした「作品」の相貌は、後に古谷綱武が「思い出」（瀬沼茂樹編『「作品」復刻版　解説・執筆者索引』一九八一・四、日本近代文学館）で、次のように振り返っている。

文学青年であった私にとって、書店に出るのを待ちかねるようにして毎号買い求めた「作品」は、当時の文壇に登場してきたもっとも新しい世代の作家、評論家たちを、執筆陣に網羅しているとも見えた若若しい純文学誌であった。まずこの雑誌の執筆者になれるということが、私の文壇登場への念願に道をひらいてくれることになると思って、私は「作品」の執筆者になることにあこがれた。

実際、一九三五年には「新進作家小説号」（一九三五・七）・「続新進作家小説号」（一九三五・八）・「新進作家短篇集」（一九三五・一二）と、新進作家特輯を実に三度も組んでいる。すでに文芸誌デビューを果たしていた太宰治もまた、他の同じくらいのキャリアの新進作家とともに、そこに「玩具（雀こ）」（一九

三五・七）を寄稿していた。同号の他の執筆者は、坂口安吾を別格とすれば、第一回芥川賞をともに争った外村繁をはじめ、丹羽文雄、中島直人、丸岡明、寺崎浩、小田嶽夫、田畑修一郎、川崎長太郎……と、いずれも長い同人雑誌遍歴を経てきた面々が並んでいる。同特集に論及した、浅見淵「文芸時評（三）才気のサンプル「作品」新進作家の小説」（「信濃毎日新聞」一九三五・八・五）には、《何れも枚数がすくないので作者の才気のサンプルを見せられてゐるやうな気がし、その点では面白かつたが、これといつて感銘の深い作品は乏しかつた》という評価があり、一定の注目を浴びていたことが確認できる。

これは逆にいえば、ずば抜けて特筆すべき才能・作品が、そこに見出されなかったということでもあるはずだ。そればかりでなく、小説のモチーフに関していえば、つづく二回の特集も併せて、作家・作品間の〝差異〟よりもむしろ〝類似〟が目をひく。具体的に頻出するモチーフをあげていけば、外地や地方をはじめとした〝題材〟の目新しさ、故郷（方言）に関するもの、死（自殺）、背景としての左翼活動歴や社会・経済の抑圧、自我の不安、等々である。もちろんこれらは、「作品」誌上に特有のものではなく、同世代の新進作家に課されてきた歴史的条件に起因するものである。その具体的な内実とは、大宅壮一が「文芸時評（完）化物はゐない」（「東京日日新聞」一九三五・一一・三）で指摘する次の諸条件である。

今日、新人として文壇に登場しつゝあるのは、主として三十歳前後から三十五六歳までの人々であるが、かれ等は欧州大戦前後のインフレ時代に教育をうけ、卒業と共に不景気のどん底に喘いでゐる社会に投げ出されて約十年間、インテリとしてもつとも不利な条件の下に、失業もしくは半失業生活の苦しみを、つぶさになめてきたものが大部分である。

もちろん個人差はあるにせよ、この時期の新進作家はこうした歴史の渦中で文学に親炙しつつ、主体形成を遂げてきたのだ。拙著『昭和十年前後の太宰治』（二〇〇九・三、ひつじ書房）でも論じたように、太宰治もまたそうした一群の新進作家の一人だったのであり、「作品」というメディア、ことに新進作家特輯は、後の文学史上の評価・盛衰を経る前の、どの作家にもあり得た可能性を垣間みせてくれる。逆にそうした地点からこそ、その後、太宰治が浮上していく諸条件を考えていくこともできるはずなのだ。